

観音の語源再考

——羅什以前の漢訳に現れる尊名を中心に——

田 中 公 明

一 はじめに

大乘仏教を代表する菩薩である観音については、ガンダーラ出土の三尊像から観音と思われる銘文 *Oloispara* が発見されたことなど、知見の拡大が続いている。

わが国においても、最近になって観音信仰の起源について注目すべき研究が現れた。その第一は辛嶋静志氏の「法華經の文献学的研究(二)——観音 *Avalokitasvara* の語義解釈——」

をはじめとする一連の研究である。これに対して斎藤明氏は「観音(観自在)と梵天勧請」「観音(観自在)と『観音經』」を発表し、観音の原語は、それが俗語に転訛した形であったとしても、「観察することが自在なる者」を意味する *Avalokiteśvara/Avalokiteśa* に他ならず、「観音」「観世音」等の訳語は、中央アジア系の不正確な写本に基づいて原義を取り違えたものに他ならないと結論づけた。この両者の見解は、旧訳の観音あるいは観世音の原語とされる *Avalokitasvara*

の解釈をめぐる対立している。

従来から筆者は、両氏とは異なる図像学・尊格史の観点から、観音信仰の起源と発展について研究を進めてきたが、今回は観音の語源について、旧訳語「観世音」を定着させた羅什以前の漢訳に現れる尊名を中心に紹介し、両説の妥当性について考察したい。

二 羅什以前の漢訳に現れる観音の尊名

羅什以前の漢訳仏典に現れる観音の尊名については、多数の先行研究があるが、ここで簡単に紹介すると、支婁迦讖訳『平等覺經』(大正 No. 361)と支謙訳『大阿彌陀經』(大正 No. 362)に現れる音写字「盧樓亘」「蓋樓亘」、同じ支謙訳『維摩詰經』(大正 No. 474)と『無量門微密持經』(大正 No. 1011)等に見られる「闍音」「闍音」という意識、そして竺法護訳『正法華經』(大正 No. 263)等に見られる「光世音」などである。なお『無量壽經』(大正 No. 360)の「觀世音」は、三国魏の康

僧鑑訳であることが疑問視されるので、考察の対象から除外する。さらに辛嶋氏は、『放光般若經』(大正No. 221)の対告衆に列する現音聲菩薩を見音聲の誤りと見て、これも Avalokitasvara であるとする。

(2) このうち闍音の闍、闍音の闍は、何れも「窺う」の意であるから、これが写本の欠陥や誤解に基づくものであったとしても、原語が Avalokitasvara であったことを示唆するものといえる。これに対して「光世音」の原語は、*Ābha-loka-svara と推定されるが、この原語を記した写本や銘文は、まったく発見されていない。これについて辛嶋氏は、最初期の大乗仏典が記されていたガンダーラ語では va と bha の区別がなく、西北インドで用いられていたカローシュティー文字では母音の長短の区別がないため、竺法護が Avalokitasvara を Ābhalokitasvara と誤解したものと考えている。(3)

いっぽう「観自在」の初出は、玄奘の新訳經典とされてきたが、唐初に活躍した智通の訳經にも見られることが指摘されている。しかし智通の訳經活動は玄奘のそれと重なっており、玄奘の帰朝後、智通が、その新訳語を採用した可能性が強い。これに対して筆者は、北周の耶舍崛多訳『十一面觀世音神呪經』(大正No. 1070)に注目している。同經は漢訳尊名としては觀世音を採用しているが、陀羅尼に現れる音写字「阿利耶跋路吉帝攝婆羅耶」「阿利耶跋路吉氏攝婆羅耶」

Āryāvalokiteśvarāya⁽⁴⁾ は、Avalokiteśvara を支持している。この事実から、遅くとも六世紀には、漢土にもたらされた写本でも Avalokiteśvara と綴られていたこと、しかし漢訳尊名としては、すでに普及していた觀世音が使われ続けていたことが推測できる。

三 支謙訳『維摩詰經』における菩薩名の訳例

この問題を考える上で、筆者は前述の支謙訳『維摩詰經』に見られる対告衆の列挙に注目している。『維摩詰經』には五二名の菩薩の対告衆が列挙されるが、そこには闍音の他に、法自在という菩薩が挙げられている。大正大学から刊行された梵文テキストによれば、法自在の原語は Dharmesvara⁽⁵⁾ (sic) であり、他の漢訳・チベット訳も Dharmesvara を支持している。Avalokiteśvara と Dharmesvara は、ともに前分が a で終わり、これに isvara が接合した形の合成語である。これがたとえガンダーラ語のような俗語に転訛した形であったとしても、同一の音法則に支配されるはずであり、Dharmesvara を法自在と訳した支謙が、どうして Avalokiteśvara を闍自在と訳さず、闍音と訳したのかという疑問を禁じ得ない。

四 竺法護訳『賢劫經』における賢劫千仏名の訳例

つぎに観音を「光世音」と訳した、竺法護の菩薩名の訳例

を検討することにした。ここでサンプルにしたのは、『賢劫經』(大正No.425)における賢劫千仏名である。なお同經のサンスクリット完本は発見されていないが、賢劫千仏名は *Anandagarbha* の *Sarvavajrodaya* に引用されている。⁽⁶⁾ また漢訳・チベット訳だけでなくコータン語訳もあるため、原語をほぼ確実に復元できる。⁽⁷⁾

そこで賢劫千仏名のうち合成語の後分が *svara* と *īśvara* になっている例のみを表にして、整理してみよう。

表では、左欄に森口「一九八九」による賢劫千仏名とその番号、中欄に Weller 1928 による賢劫千仏名とその番号、⁽⁸⁾ 右欄に田久保「一九七五」による賢劫千仏名のコータン語訳と竺法護訳『賢劫經』における漢訳名を対照させた。

竺法護は、一仏名を原則として漢字三字で翻訳しているが、サンスクリットの一仏名が、竺法護訳では漢字六字つまり二尊名に対応している箇所がある。また尊名の欠落あるいは他の尊名との交代によって対応する尊名が見いだせないものは、「対応なし」と表記した。

表のように、竺法護は合成語の後分が *svara* になる尊名では、「音」「響」「聲」などを用い、*īśvara* になる尊名では「自在」「豪」「貴」などを用いて、明確に訳し分けていることが分かる。唯一の例外は、749. *Ghoṣeśvara* (清除音) であるが、これもチベット訳では *gdans śhan pa*、コータン語訳は *Ghaḍhitasvara*⁽⁹⁾、

表 賢劫千仏のうち尊名が *svara* と *īśvara* で終わっている例

	<i>Sarvavajrodaya</i>		F. Weller	田久保	竺法護訳
106	Dharmeśvara	105	Dharmeśvara	Dharmēśvarau	法自在
166	*Gandheśvara	154	Gandheśvara	Gandhēśvarau	香甚豪
196	Dharaṇīśvara	196	Dharaṇīśvara	Dhāraṇī-śvarau	總持豪
296	Nandeśvara	297	Nandeśvara	Nandīśvarau	猶自在
328	Brahmasvara	329	Brahmasvara/Brahmeśvara	Brrāhma-svarau	號梵音
394	Madhusvara	394	Madhusvararāja	Madhu-svarau	音柔和
399	Dharmeśvara	399	Dharmeśvara	対応なし	対応なし
549	Guṇagarjitasvara	551	Garjitasvara	Garjita-svarau	和音佛
628	Susvara	630	Susvara	Susvarau	善音響
711	Dharmeśvaragiri	709	Dharmeśvaragiri	対応なし	対応なし
720	Amitasvara	720	Amitasvara/Amṛtasvara	Amṛtasvarau	號無限音響佛
724	Viśiṣṭhasvara	724	Viśiṣṭhasvara	Viśiṣṭha-svarau	號極貴宣暢音
749	Ghoṣeśvara	749	Ghoṣeśvara/Ghoṣasvara	Ghaḍhita-svarau	清除音
755	Dundubhimeghasvara	755	Dundubhimeghasvara	Duṃdubhi-megha-svarau	雷震吼雨音聲
764	Vihārasvara	764	Yajñasvara	Yaśa-svarau	法祠音
765	Jñāneśvara		対応なし	対応なし	対応なし
842	Simhasvara	841	Simhasvara	Simha-svarau	師子響
877	Dharmeśvara	875	Dharmeśvara	Dharmikau	法所遊
920	Dharmeśvara	919	Dharmeśvara	Dharmēśvarau	法貴佛
928	Jagadīśvara	927	Jagadīśvara	Jagatēśvarau	対応なし
968	Gaganasvara	967	Gaganasvara	Gagana-svarau	號虛空音響辭
974	Ratnasvaraghoṣa	973	Ratnasvaraghoṣa	対応なし	対応なし
985	Vibhaktajñāneśvara	983	Vibhaktajñānasvara	Vibhakta-jñāma-sārau	郭伴慧由自在
999	Dr̥dhasvara	993	Dr̥dhasvara	Dr̥dha-svarau	其音強

『佛名經』(大正No. 411)は「般陀音」、『現在賢劫千佛名經』(大正No. 447)は「槃陀音」と、何れも音に係る訳語を用いているから、竺法護訳の原語は後分が *svata* であった可能性が高い。

竺法護は、訳經に当たってサンスクリットの語義を誤解したり、合成語の分析を誤ることが多いといわれ、賢劫千仏名でも、その好例を見ることができる。しかし合成語の後分が *svata* と *īsvata* になっている例に関しては、ほぼ正確に訳し分けていることが分かった。したがって彼の用いた原本が *Avalokiteśvara* あるいは、その俗語形で記されていたとするなら、少なくとも「光世音」とは訳されなかったと思われる。

五 『平等覺經』と『大阿彌陀經』に見られる音写字

つぎに『無量壽經』の古訳に見られる音写字「盧樓亘」「蓋樓亘」について検討してみよう。なお辛嶋氏は、「盧樓亘」について「い」の音写からは *Avalo.svar* という原語が推定されますが、正確な原語の形を復元することは不可能です⁽¹⁰⁾と述べ、これ以上の考察を行っていない。これは辛嶋氏の他稿にも当てはまるが、氏は後漢から三国時代までの漢字音写について、Coblin 1983を参照している。ところがCoblinによる後漢の漢字音は、隋唐時代の漢字音(中古音)に若干の変更を加えたものに過ぎず、筆者はその復元に疑問を感じている。

これに対して水谷真成博士は、漢訳仏典に見られる音写字の分析を通して、後漢から南北朝にかけて上古音が中古音に移行する過程を考察した。とくにサンスクリットの漢字音写で問題になるのは、陰類の語末子音がいつ頃消失したのかという問題であるが、現在のところ確定的な結論は得られていない。しかし竺法護・羅什はともかく、支婁迦讖・支謙ら三国時代までの訳經家の漢字音写には、上古音の残滓があったと考えた方が合理的な例が存在する⁽¹¹⁾。そこで参考のため、本稿では↓の上に上古音・下に中古音のローマ字化を配した。(ローマ字表記は董同龢「一九四四」を参照した)

上述の「盧樓亘」の「盧」は(*lā* ↓ *le*)であるのに対して、「蓋」は(*kā* ↓ *ke*)であるから、一般に「蓋樓亘」は「盧樓亘」の誤記と見なされている。つぎの「樓」は(*lā* ↓ *leu*)である。辛嶋氏は後漢代には陰類語末子音が消滅していたとするCoblinに従って *Avalo.svar* と復元したが、語末子音が残存していたなら、*Avalok* あるいは *Avaloka* と読むことが可能になる。そして一番問題となるのが、最後の「亘」である。ここで問題となる *svata* と *īsvata* の区別について考えると、サンスクリットの *ṣa* に対応する子音は、中国語音韻学では歯頭音の「心母」と呼ばれる。これに対して *ṣa* に対応する子音は、正歯音の「審母」である。つまり審母と同じ子音をもつ音写字は、*ṣa* である可能性が高い。例を挙げると

「輪婆迦羅」*Subhakarā*「舍利弗」*Sariputra*、前述の「阿利耶跋路吉氏攝婆羅耶」の「輪」「舍」「攝」は、みな審母に属している。ただし漢字は象形文字から発展した表意文字なので、漢語として有意義な音節以外は文字とならなかった。したがってすべての子音と母音の組み合わせが、漢語として存在する訳ではない。そこで經典の漢訳者は、漢語に存在しない外国語音をどのように表記するかに腐心することになった。

ここで問題となる「亘」の音価は、(*siwān* → *siwān*)で、子音は心母となる。ところが母音にはイの拗音が含まれている。この場合、日本でも *sa* を「シャ」と表記するように、*sa* を音写することも可能になる。なお辛嶋氏が、「亘」の音価として *svat* を想定したのは、『平等覺經』と『大阿彌陀經』で、世自在王仏 *Lokeśvara* (*rāja*) が「樓夷亘羅」と音写されたためである。この例では、「亘」が *sva* の音写として用いられている。ただし「亘」の音価は、*siwān* であって *siwat* ではない。上古音には、多くの学者が語末子音 *ʔ* を想定する「歌部」*g* があるが、声母が審母で韻母が歌部の合口音 (*vat*) の字は存在しないため、「亘」が用いられ、次の「羅」と連続することで *svara* を表記したと思われる。

このように、『無量壽經』の古訳に見られる音写字「盧樓亘」からは、**Avalokasvara* あるいは **Avalokeśvara* なる語形⁽¹²⁾

が予想されるが、合成語の後分が *svara* と *isvara* の何れであったのかは確定できない。ただし **Avalokasvara* なる語形が、竺法護の「光世音」の原語を示唆することは注目に値する。

六 観音の語義

観音 *Avalokitasvara* の語義について辛嶋氏は、「普門品」長行の「觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫」を挙げるが、斎藤氏が指摘したように「觀其音聲」の句は、羅什訳に近いカシユガル本を含めて梵本には *nāmadheyam śrīnyus* (名号を聴聞すれば) とあるばかりで見出せない。⁽¹⁴⁾ いっぽう「普門品」偈に見える「妙音觀世音 梵音海潮音 勝彼世間音 是故須常念」*meghasvara dundubhisvaro jaladharagarjita brahmasusvarah/ svaramaṇḍala pāramiṅgataḥ smarāṇīyo avalokiteśvarah*// は、対応する梵文がネパール系・中央アジア系写本ともに認められ、「普門品」偈の成立が長行より遅れたとしても、観音の尊名が *svara* で終わっていた一時期を想定しなければ、意味不明になってしまう。

辛嶋氏は、尊名の後分が *svara* であつたものが、時代と共に *isvara* に代わつた例として、『法華經』梵本に見える *Meḡheśvara* の例を挙げるが、これは前述の賢劫千仏の 749. *Ghośeśvara* (清除音) の例に符合している。このように尊名の後分の *svara* が *isvara* に変化した例は多数指摘することができ

るが、その逆は管見の及ぶかぎりでは、ほとんどなく、存在したとしても少数であつたと思われる。さらに辛嶋氏は、*Avalokitasvara* の語源として「念を觀察する」**Avalokitasvara* を指摘するが、この語形は、写本・銘文等で確認されたものではない。また上述のように、より古い語形として **Avalokasvara* あるいは **Avalokesvara* を示唆する音写字「盧樓亘」があるため、再検討が必要と思われる。

いっぽう斎藤氏は、*Avalokitesvara* が二―三世紀に使用されていた証拠として、*Nāgārjuna* の *Suhyteka* 120 を挙げるが、これはネパール系写本の読みである。*Suhyteka* は韻文なので、*Avalokitesvara* と *Avalokitasvara* に韻律上の差異があれば、*Avalokitesvara* が当初からそのように綴られていたのかを判定する決定的証拠となりえたが、残念ながら両者には、音節数・韻律上の長短の両面において差異がない。

また斎藤氏が指摘したマトウラー碑文に現れる *Āryāvalokitesvara* や *Bhāvaviveka* による *Avalokiteśa* の用例は、*Avalokitesvara* が常套的に現れるギルギット写本と同時代の五―六世紀まで下がるため、何れも決定的証拠とはなり得ない。

七 梵天勸請と観音

さらに斎藤「二〇一」は、*Mahāvastu* や *Lalitavistara* 等に見られる梵天勸請とブッダの説法の決意という説話を観音信

仰に結びつけるが、筆者にはあまりにも唐突に思われる。

すでに谷川泰教氏が詳細に論じているが、*Lalitavistara* で梵天勸請とブッダの説法の決意を象徴する菩薩は、観音ではなく纔発心転法輪 *Sahacitotpādadharmacakrapravartin* である。纔発心転法輪は、その後も多くの大乘仏典に登場し、最終的には金剛界曼荼羅の金剛因菩薩にまで発展する。⁽¹⁷⁾これに対して観音は、説出世部に属する *Mahāvastu* はもとより、*Lalitavistara* の全篇を通じて一度も登場していない。

斎藤氏は、*Lalitavistara* において、ブッダが梵天勸請の後、仏眼をもって「世間を觀察」*vyavalokayan* したという記述に注目し、これを觀察することが自在なる者 *Avalokitesvara* と結びつける。しかしこの後、ブッダが初転法輪の対象として考察したのは、ウドラカ・ラーマプトラやアーラーラ・カーラーマそしてブッダと修行を共にした五比丘など、解脱を求める修行者であり、観音の救済対象となる凡夫ではない。

仏が仏眼あるいは天眼をもって世間を「觀察する」*vyavalokayati* という表現は複数の大乘仏典に見られ、『二万五千頌般若経』では一〇例が確認できる。⁽¹⁸⁾このうち八例は、『現觀莊嚴論』に基づく分科で法身の衆生救済の事業 *kṛti* を説く部分に集中しており、菩薩が六道の衆生を救済することを説くので、観音と全く無関係とはいえないが、その主体は菩薩一般であり、観音とは特定されていない。*Lalita-*

vistaraとは異なり、『二万五千頌般若経』は観音を対告衆に列している。しかし本文において観音が活躍することは全くなく、対告衆に見える観音の名は、他の大乗仏典から取り入れられたものと思われる。

現在のところ観音と vyavalokayati を明確に結びつけるのは、斎藤氏が指摘した『般若心経』の「觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空」の「照見」 vyavalokayati を除いては見いだせない。なお一切を見通す仏眼の働きは、後に尊格化されて仏眼仏母 Buddhālokanā となり、我が国でも高山寺の明恵が熱心に信仰したことが知られている。しかし仏眼は仏部の部母であり、観音とは全く別の女性尊である。

さらに斎藤氏は、梵天と観音の図像の類似性を指摘するが、ガンダーラ彫刻における梵天勧請は、ブッダの左右に梵天・帝釈天が侍立あるいは跪座し、合掌するという構図である。

後のチベットの仏説法図では、梵天が法輪、帝釈天が法螺という説法の象徴を捧持し、ブッダに説法を勧請したことを示すが、⁽¹⁹⁾ Lalivastara では、初転法輪に先立ってブッダに法輪を献じるといふ役割は、前述の纒発心転法輪に与えられている。いっぽう梵天相観音はヒンドゥー教のブラフマー像に似た四臂像で、その持物に法輪が含まれることはない。⁽²⁰⁾ 観音の持物としての法輪は如意輪観音などに限られ、これも説法

の勧請者ではなく、転輪聖王を意味するものと考えられている。

八 まとめ

以上の考察をまとめてみよう。大乗仏教を代表する菩薩、観音は「音を觀察する」あるいは「世間の音を觀察する」という不可解な漢訳尊名を有していた。これについて玄奘は、従来の訳は誤訳であるとして「觀自在」 Avalokiteśvara の訳語を採用し、現存するほとんどの梵語写本も、この読みを支持している。ところが中央アジア系の古写本から「音を觀察する」に対応する Avalokitasvara が見出され、現在までに一〇例ほどが確認されている。

この問題に関する斎藤・辛嶋両氏の見解の相違は、大乗仏典の成立に関する立場の違いに起因している。辛嶋氏は、大乗仏典の原語は正則サンスクリットではなく、中世インド語が徐々にサンスクリット化することで梵語大乗仏典が成立したと考える。これに対して斎藤氏は、玄奘『大唐西域記』や玄奘『一切経音義』の記述を踏まえ、旧訳の誤訳は原本となった中央アジア系写本の不正確さに起因すると解釈する。

幅田裕美氏は、『大乘涅槃經』の中央アジア系梵本の校訂を通して、そのサンスクリットが、写本の年代が下がるにつれて正則文法に近づくという経験則を発見した。これは辛嶋

説を裏づけるものといえる。

そして五世紀にエフタルの侵入を受けて、シルクロードの仏教に絶大な影響を及ぼしたタキシラの仏教大学が衰え、インド古典文化の保護者を自任するグプタ朝によってナーランダー僧院が創建されると、仏典の正則文法化は、さらに進展したと考えられる。そのナーランダーで学んだ玄奘が、旅行の途次で中央アジア系の古写本を目にしたなら、正確きわまりないものに映ったことは想像に難くない。玄奘は、シルクロードを旅したことはなかったが、玄奘とほぼ同時期に大慈恩寺で訳経に従事しており、中央アジア系写本では *lokeśvara* が *Avalokitasvara* と綴られていたとの情報も、玄奘經由で得たと推測される。しかしこのような一見不正確な写本にこそ、西北インドで成立した古形が保存されていたのではないだろうか。

本稿では、原語が知られている菩薩名の漢訳例を調査し、羅什以前の訳者が、合成語の後分が *svata* と *īsvata* になっている固有名詞を、ほぼ正確に訳し分けていたことを突き止めた。

この方法は、写本の言語がサンスクリットなのかガンダーラ語等の中世インド語であったのか、文字がプロト・シャラーダ等のブラフミー系なのかカロシユティーであったのか等の困難な問題を飛び越えて、一定の結論を得ることができ

る点で実践的であると思われる。

そしてその結果は、辛嶋説に有利なものとなった。ただし本稿で指摘したように、辛嶋氏は後漢時代には陰類語末子音が消滅していたと考える Coblin によるため、いくつかの原語の復元に失敗しているように思われる。また「廬樓亘」が示唆する **Avalokasvara* あるいは **Avalokēśvara* は、辛嶋氏が提唱する **Avalokīśmāra* 起源説にも反するので、この点については再検討が必要であると思われる。

斎藤氏が指摘した梵天勧請やブツダの世間観察は、仏教の教理上は重要なトピックだが、教理上重要な観念の尊格化が、必ずしも民衆レベルで信仰を集めるとは限らない。それは本稿で紹介した纔発心転法輪や仏眼仏母が、観音のような信仰を受けなかったことから推測される。

観音信仰の起源を知るためには、大乘仏教興起時代のインドにおける社会・言語・文化・政治情勢等にまたがる、より広い視野が必要になると思われる。

- 1 現在では両者の訳出順序は逆であるとする説が有力になっている。
- 2 諸橋『大漢和辭典』巻十一(大修館書店)、七八〇によれば、「闍」は「闍」の偽字。
- 3 辛嶋「二〇一三」五四三―五四四。
- 4 大正二〇、一五〇上。

- 5 大正大学総合佛教研究所「二〇〇四」、八。
- 6 森口「一九八九」。
- 7 田久保「一九七五」。
- 8 Weller 1928. なお Weller のサンスクリット尊名は、清朝時代に編集された満漢梵藏蒙合璧の二次資料に依っており、梵本を参照したものではない。

- 9 田久保「一九七五」、一五一。
- 10 辛嶋「二〇一三」、五四三。
- 11 水谷「一九六七」。水谷博士は、去声字について陰類語末子音残存の可能性を指摘したが、現在では平声・上声にも語末子音を想定する見解が一般的になっている。
- 12 入声終声や陰類語末子音の後には、^hを補うのが一般的であるが、「阿差末」*Aksayamati* のように入声終声の後に^hが入る例もある。

- 13 辛嶋「二〇一三」、五四七—五四八。
- 14 斎藤「二〇一三」、一八五—一八七。
- 15 辛嶋「二〇一三」、五四五。
- 16 斎藤「二〇一三」、七—八。
- 17 谷川「一九九九」。
- 18 Kimura 2009, 2; Kimura 1992, 137; Kimura 2006, 49–52.
- 19 代表的な例としては、デルゲ版仏伝図九幅セット *mdzad pa dgu than* の本尊タンカと転法輪の幅が挙げられる。
- 20 田中「一九九三」、四八—四九。

〈文献表〉

辛嶋静志「法華經の文献学的研究(二)——観音 Avalokitasvara の語義解釈——」『創価大学国際仏教学高等研究所・年報』

観音の語源再考(田中)

一九九九。

辛嶋静志「阿弥陀・観音・般若經——大乘仏教とガンダーラ——」
宮治昭編『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』平成
20年度～平成24年度科学研究費補助金基盤研究(A)報告書
Vol.II、二〇一三。

斎藤明「観音(観自在)と梵天勧請」『東方学』一二二、二〇一一。
斎藤明「観音(観自在)と『観音經』」『伊藤瑞樹博士古稀記念論
文集・法華文化と関係諸文化の研究』山喜房佛書林、二〇一三。
大正大学総合佛教研究所『梵藏漢対照『維摩經』『智光明莊嚴經』
大正大学出版会、二〇〇四。

田久保周譽『敦煌出土于闐語秘密經典集の研究』春秋社、一九七五。
田中公明「インドにおける変化観音の成立と展開——いわゆる四
臂観音の解釈を中心にして——」『美術史』一三三、一九九三。
谷川泰教「纔発心転法輪菩薩考」『密教文化』二〇二、一九九九。
董同龢『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所、一九四四。
水谷真成「上中古音の間における音韻史上の諸問題」『中国文化
叢書1 言語』大修館書店、一九六七。

森口光俊『Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika Sarvavajrodaya 梵文テキスト
補欠——新出写本・藏・漢対照：賢劫千仏名を中心として
——』『智山学報』三八、一九八九。

Coblin, W. South. *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*. Hong
Kong: Chinese University Press, 1983.

Habata, Hiromi. *Die Zentralasiatischen Sanskrit-Fragmente des
Mahāparinirvāṇa-mahāśūtra*. Marburg: Indica et Tibetica Verlag, 2007.
Kimura, Takayasu. *Pañcaviṃśatisāhasrikā-Prajñāpāramitā I-1*. Tokyo:
Sankibo, 2009. *Pañcaviṃśatisāhasrikā-Prajñāpāramitā V*. Tokyo:
Sankibo, 1992. *Pañcaviṃśatisāhasrikā-Prajñāpāramitā VI-VIII*.

観音の語源再考（田 中）

Tokyo: Sankibo, 2006.

Weller, Friedrich. *Tausend Buddhanamen des Bhadrakalpa*. Leipzig:

Verlag der Asia Major, 1928.

（平成二五年度科学研究費補助金基盤研究（C）「アジア各地における密教図像と文献の比較研究」の成果の一部）

〈キーワード〉 観音、光世音、盧樓亘

（公益財団法人中村元東方研究所研究員）

一〇

新刊紹介

松本 史朗 著

仏教思想論 下

A五判・五四四頁・本体価格一三、〇〇〇円
大蔵出版・二〇一三年四月